



## その4 「タイ環境学習キャンプ」 8.10～8.19(9泊10日)

今回も首都バンコクから車で数時間、ウタイタニー県バンライ郊外の環境学習施設「パンダキャンプ」を拠点に活動を展開します。毎年訪れているファイカケン野生生物保護区は世界遺産であり、観光客はもとより、地元の方でも許可がなければ入れません。野生の牛、鹿、孔雀、サイチョウなどの貴重な野生動物を観察します。また、カレン族やラオ族などの少数民族の部落を訪問し、彼らの文化を学習します。恒例の現地教員や子供達とのワークショップも好評となっています。高層ビルの立ち並ぶバンコクと少数民族が暮らす亜熱帯の森に皆さんは何を感じるでしょうか？通訳、ガイドも同行し、現地のラジャバト大学との連携もありますので安心してご参加ください。

日程：8/10(土)～19日(月) 対象：高校生～一般(中学生以下は要相談)  
 参加費：会員 155,000円 非会員 165,000円 ※航空券と現地での費用が含まれています。  
 申込み：6月7日(金)締め切りです。出発前に参加者ミーティングも行いますのでご安心を！

## 「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから20年⑪

(前回からの続きです。タイに興味を持った方は夏のタイ環境学習キャンプにぜひぜひお申し込みください！！)

パンダキャンプに戻り、今度はミツバチの話を書く。実は、シリポンさんは私たちがここに来る2日前、宿泊施設の壁に着いたミツバチの巣を巣箱に入れようとして、200匹ほどのハチに刺され、意識を失い緊急入院したという。その場所へ案内してくれた。

夕方3人のマッサージの予約が取れないので、いつも行く病院と違ったところを当たってみるためにバーンライの町に出た。ちょうど娘のパンダを迎えに行ったポータンさんと一緒になった。マッサージは3人一緒にできないので、もう一度病院を当たることになった。町に出て来たついでに夕食を食べることになった。ラーメン屋に入った。



本当はカンチャナブリーで大変だったキー、イエンの二人を休ませる配慮だった。パンダキャンプに戻ってから、シリポンさんが勧めるコーヒーを飲んだ。以前電話でおいしいおいしいと言っていたやつだ。コーヒーにハリナシバチの花粉を入れ、ハチミツとマナーオの汁を入れる。悪くはないが、別にコーヒーにいれなくてもいいとゴミさんが言っていた。みんな疲れていたもので、この日はいつもより早くバン

ガローに戻った。



**8月15日**

朝、ゴメさんが対岸のほうで鳥を見ていたので、ポンティップと一緒に川に架かっている竹の橋を渡って合流した。便所の前でチメドリ (Babbler) を追って、いい写真は撮れなかったが一段落したとき、ゴメさんがたった今写したという写真を見せてくれた。びっくりした。ミナマイロチョウ (Blue-winged Pitta) だった。



ここ何年か、シリボンさんから、パンダキャンプに繁殖にきていると聞いていたし、去年は放棄された巣を見せてもらった。見たいものだと思っていると広場状の背丈の低い草むらの中に、ミミズをくわえている姿が見えた。餌探しに夢中になっているので、私たちの姿を見てすぐに逃げることはなかった。それで、まだ技術が伴わないゴメさんの最新カメラも威力を発揮したようだ。しかしこんな時に、あとの二人は何をしているのだ。行って呼んできたが、「探鳥は何時いかなる時でも気を抜いてはいけない」という厳しさが欠如しているように思う。反省してもらいたい。しかし早朝から縁起のいいことが起こったので、今日のワークショップはうまくいくと思った。



午前中は小学4年生30人ほどが対象で、ゴメさんが講師になりポンティップが通訳、午後は地元の養蜂に関心のある人8人が対象で、シリボンさんとゴメさんが講師になり私が通訳をした。ゴメさんはいろいろな実験遊びをしたが、休憩をはさんでしたシャボン玉作りは大人気になった。ストローでのシャボン玉に飽き足らず、子供たちは手を上手に使って大きなシャボン玉を作り始めた。





また休憩時間に大窪さんがやった「おに」の遊びも子どもたちには面白かったようだ。

昼食の後、主にファミリーフォレストの会員の人々が来た。シリポンさんが特にハリナシバチのことに話して、ファミリーフォレストの会長として、ハリナシバチの養蜂の経済的な利点についても話をした。



▲西洋ミツバチ (左) とハリナシバチの蜜の入った巣、花粉

ゴミさんは日本での西洋ミツバチと日本ミツバチの養蜂について話した。個人的には日本ミツバチの養蜂に関心が持てた。ゴミさんの報告はよくできていて、取材も丁寧にしていたので、改めて敬意の念をもった。



二人の話が終わってから、シリポンさんの師匠当たる人から話があった。ファイルを用意話された。そのファイルを見たゴメさんはよくできていると言って褒めていたが、ポンティップは辛辣で、話を聞いた後で自分の宣伝をしているだけだと言っていた。しかし、シリポンさんが外に作ったミツバチの巣を箱に入れようとして失敗した作業を難なく

やってのけたのにはさすがだとキャリアを認めていた。



ワークショップが終わってから三人は病院での予約が取れたので、2時間半のマッサージに行った。大窪さんはこれを期待していたようで嬉々としてはしゃいでいた。「これを待ったんや」と。私たちは水浴びをするために宿泊所に戻った。私は少し仮眠してから、バンコクから持ってきた川崎桃太「フロイスの見た戦国日本」を読んでいた。8時半過ぎによかったと3人が返ってきた。それから遅い夕食になった。あすはパンダキャンプに多くの訪問者があるので、その用意のためにシリポンさんは先に失礼したいと言ってきたので、私たちも結構疲れているので寝床に戻ることにした。

**8月16日**

朝は全員昨日ヤイロチョウをみたところに集まって鳥を探したが、影も形もなかった。口にくわえていたミミズの量からして、ヒナは一匹のはずはないと思っていたので、餌探しをやめるようなことはなく、今日は餌場を変えたのだらうと思った。

朝ごはんを食べていたら、そろそろ訪問客がやってきていた。ファミリー・フォレストに関してシリポンさんの話を聞きに来た人たちだ。ラヨンとカラシンから50名ほど来ると聞いていた。シリポンさんから顔出しをしてほしいと頼まれていたので私ら5人、それぞれ挨拶をした。



今日の私たちの予定は昼から「プー・ワイ」洞窟に行くことになっていた。ただ、ポンティップはあす大学で会議があるのでバンコクに戻らなければならない。例年のようにスンプリーのダーン・チャーンまで送ってくれるものがないので、バーンライからバスでスンプリーの町まで行き、そこから乗り換えてバンコクに帰るといった。

今日の昼飯は訪問客の分も作るということで、ノイさんの娘さんも応援に来ていた。昼が終わって、訪問客はバーンライの名所を巡るので、シリポンさんが付き合ったようだ。私たちはポータンさんの運転で先に洞窟まで連れて行ってもらった。その後ポータンさんはポンティップをバスターミナルまで運んで、英語を教えに中高等学校へ行った。大窪さん以外この洞窟は3回目になるので、懐中電灯があれば何とかなるだろうと思っていたが、どうにもならなかった。入口から入ってすぐに道を見失ってしまった。わからないので行けそうなところを辿っていると、出口に出てしまった。



「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり」。でもこの洞窟にすむ9種のコウモリのうち2種のコウモリの写真を鮮明に撮ることができたのは不幸中の幸いだった。3時過ぎには洞窟の外に出て、辺りの茂みで虫やトカゲなどの写真を撮りながらポータンさんが迎えに来るのを待っていた。約束の時間はとくに過ぎているのに、ポータンさんは来なかった。この時再び「幸い」がやってきた。Tortoise Beetle(羽が透明なカメの甲羅のような形をした甲虫。例えばテントウムシやハムシのような姿)と呼んでいる虫の写真が撮れたのである。ずいぶん小さかったが、後日私の持っている「虫ハンドブック」で調べるとよく似た奴の体長が8-13ミリになっていたので合致していると思う。



この後、新人が必ず行かなければならない寺に準ずる寺へ大窪さんが参拝なされた。バーンライの人間になるための通過儀礼のようなものだ。そして今日は木曜日。定期市のある日なのでその場所へ連れて行ってもらった。ゴミ・ゴメは相変わらず昆虫のから揚げにたかっていたが、一方、この前、筏の上で食べた「仙人の桃」という果物を熱い視線で探し回った。しかし、見つからなかった。味はイモのようとも、カボチャのようともいえたが、なかなかいける味だったのだ。これも後日ポンティップが調べたらアンデス原産になっていた。



市に到着する前だったか、シリポンさんから電話があって、ヤイロチョウの親がいなくなりヒナが食堂のほうでうろろしているの、猫に捕まる可能性もあり保護したと言ってきた。パンダキャンプに帰ると、簡易の檻にヒナが一匹ピーピーと大きな声で鳴いていた。しばらくしてヒナ用の餌を買いに行っていたシリポンさんが戻ってきた。私たちは放すべきだと訴えたが、今日は多くの人がヒナの潜んでいる辺りに入り込み親は驚いたのか行方になっていること、ヒナを放っておくと危険なのでこのまま飼うようなことを言う。そしてヒナをつかみ、檻から出して買ってきたカイコのさなぎを与えるとヒナは一気に飲み込んだので、ちょっと驚いた。結構ものおじしていないのだ。



しかし、ヒナがそれなりに育っているなら親は簡単に捨てるはずはないし、この前集めていたミミズの量からしてヒナは一羽だけではない筈なので、どこかに避難しているだけで必ず帰ってくると言ったら、シリポンさんは手で握っていたヒナをパッと放した。ヒナは5, 6メートルほど飛んで茂みに入り込んだ。その後日が暮れるまでヒナは鳴き続けたので、本当に親鳥が帰ってくるのか不安だった。夕方からはバーンライのバンド「スム・カオ・レーン」が来ることになっている。ポータンさんもフィリピン人の若い女の英語の先生を5人連れてきた。先に夕食を済まして、広場兼駐車場にテーブルといすを並べ、さっそく歌を聴き出した。既成の歌を歌うが、オリジナルも歌う。カラワンやカラバオの影響を受けているが、独自の音楽である。



ちょっと雨が降ってきたので食堂のほうへ場所を移す。フィリピンのグループが歌う。日本のグループが歌う。そしてゴメさんの舞台になった。「イエス・マン ブルース」はバーンライの一部で非常に有名になっているが、今回目を引いたのはハーモニカ演奏だった。セントルイスブルース。伴奏をしたスム・カオ・レーンとも息がぴったりで、老後の生活場所が決まったようなものだった。私は迷わず「サーラウィン河」をリクエストした。いい歌である。この夜、寝床に戻ったのは11時半ごろになっていた。



### 8月17日

寝床の中でもヒナの親を呼び声が聞こえた。私たちは朝8時にバーンライを出発することになっているので、シリポンさんにはもし親が帰らなかったら、今度こそ捕まえて飼ってほしいということしか言えなかった。

朝ごはんのおかずの一つに「パム」が出た。ミジンコ浮草というもので、バンコクではあまり見かけないものだ。スープに入れたり、軽くいためたりして食べるのだ。昨年ポータンさんにもらって、水槽に入れ花が咲くのだったら見てみたいと思っていたが、あまりにも小さいのでよくわからなかった。引越しも無事やり過ごしたが、だんだん少なくなって最後は水槽をひっくり返してしまった。



▲お世話になったパンダキャンプのみんなと 宿泊していたバンガローの前で (左がポータンさん。シリポンさんの奥さん。右から4番目が娘さんのパンダちゃん。)

ほぼ時間通りにバンが来た。ポータンさんとパンダが来ていて全員お土産を買った。ゴミ・ゴメ・私の三人はパンダが描いた肖像画ももらった。私の場合はポンティップと一緒に描いてあった。とてもうれしい。私はパンダをごく小さい時から知っているが、大きくなったものだ。バンにはポータンさんとパンダも乗った。まず最初にカンペンセーンにあるカセサート大学へ向かった。ここでシリポン・ポータン夫婦の息子デンに会うのだ。デンは大学の2年生で、昆虫を専攻している。いま大学にヒマラヤハゲワシ (Himalayan Griffon) が保護されていて、

私たちがこの鳥を見れるように話をつけてくれたのだ。



行ったところは猛禽類の診療所で、いろいろなワシ・タカ、フクロウ類が治療され療養生活を送っていた。ここで獣医さんに話を聞いたが、肝心のハゲワシがどうしてこの施設にいるのかその経緯について質問するのを忘れてしまった。この後、デンもバンに乗ってプラナコーンへ向かった。明日パンダキャンプは忙しいらしいので、手伝いのために家へ帰るのだろう。シーナカリンダム湖で採集した昆虫、同定してほしいとデンに頼んだのでいつか結果が分かるだろう。<sup>※</sup>

3人がバンでウタイタニーに帰っていったから、シリワット先生が来られた。私たちは先生に小さな喫茶店に誘ってもらい、今回のウタイタニーでの話をしたり、先生が住んでおられるロップリー分校の長引く停電の話などを聞いた。ゴミ・ゴメ・大窪の3人はまだここで2泊するのだから、またバーンブーへでも誘うつもりで私は家に向かった。



▲ラジャバトプラナコーン大学のシリワット先生(中央)

小菅村にも来ている。このあと夕食をご馳走になった。

シリボンさんから電話で、行方をくらませていたミナマイロチョウの母親、姿を現したという。これでヒナも私らも一安心である。

※8月27日付けより抜粋

5時ごろボンティップが帰ってきて、デンからメールが来ているという。この前道程を頼んだ種類わかったのだ。大小同じ種でVeliidaeだという。名前がわかったのでインターネットで調べてみるとVeliidaeはカタピロアメンボ科のことで、日本には3亜科いるそうだ。

※2 若林さんは帰宅したがゴミ・ゴメ・大窪の3人はシリワットさんに夕食に誘われ美味しい中華料理店に連れて行ってもらった。その後シリワットさんの車でチナタッタさんの待つノイズプレイスへ送ってもらった。おいしいビールとショーを見てバンコクの夜を楽しんだ。



翌8月18日はチナタッタさんの案内でゴミ・ゴメ・大窪の3人は午前中水上マーケットへ行き、



午後は恒例のチャトチャのウィークエンドマーケットへ。そして夜は日本からやってきた豊田勇造ライブへ。チナタッタさんと今回で3回目の参加になる。



三晩音楽三昧であった。

8月19日

今日は3人が日本へ飛び立つ前の時間を使って、バーン・プーへ行った。8時にプラナコーンのホテルに迎えに行き、9時半ごろには着くことができた。去年ゴメさんを案内して喜ばれたので、今年もバーン・プーを選んだ。空は曇りがちでたまに時雨れてくるが、ひどくならなかったのがよかった。まず棧橋を歩いてみるが、水が満ちてきていた。これではあまり鳥は見ることはできないので、後背湿地のほうへ行った。この辺りのマングローブ林もよく繁茂している。勉強するにはもってこいだろうが、難点は蚊の群れである。待ってましたとばかりにたかってくる。探鳥も手で払いながらするしかなかった。時期が時期だけに多くの鳥は期待できなかったが、鳥見小屋から遠くのほうにインドトキコウの群れが見えたので、そっちのほうに近寄ってみた。マングローブ林がぎっしり生えているのでなかなか姿を捉えることができなかったが、一部探鳥のためか伐採してあったので、そこからはよく見えた。しかし鳥からもよく見えるので、鳥は落ち着かなくなり、飛び立ってしまった。インドトキコウから少し離れたところに2羽のクロトキがいた。



これが久しぶりの、タイで初めて見る鳥になった（日本で一度見たことがある）。



その後マングローブ林が見渡せる塔に登り、海岸線に出た。海の近くになれば蚊の襲撃も和らぐかと思っただが、そうは問屋がおろさなかった。ここにも鳥見小屋があったので中に入ると、打ち寄せる波の

中に10羽ほどのインドトキコウが何かを漁っていた。結構近くに見れたので、みんないい写真が撮れただろう。



その後、棧橋を渡って軍のレストランで昼を食べる。



次に行ったのはバーン・プリーのオールドマーケット。150年の古さを誇る水上マーケットである。案内書もらったポンティップが行きたいと言っていた涅槃仏は結局車を止めたバーン・プリー・ヤイクランという寺にあった。ワット・ポーほどはなかったが、かなり大きな仏像だった。帰りは高速を使ったので3時過ぎにはプラナコーンに着いたが、連日のビールの飲みすぎ疲れか、後部座席で3人ともたわいなく眠っていた。これで3人とお別れになったが、シーナカリンダム湖での筏暮らし、バーンライでのワークショップを含めて、いい時間が持てたと思う。

